

# 中山遺跡

～緊急発掘調査報告書～

昭和60年

箕輪町教育委員会

# 中山遺跡

昭和 60 年

箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

昭和30年箕輪町は町村合併のとき、箕輪中学校を新築した。そこは中山遺跡の一部であった。今回中学校全面改築を計画し、昭和57年より工事に着手した。この全面改築計画は、旧グラウンドに校舎を建て、旧校舎跡地を新グラウンドとするものである。

箕輪中学校周辺は、昭和初期西天竜開発工事により、畑地を水田にするため整地をし、更にその水田地帯を学校用地として整地した。

校舎を建てる旧グラウンドは基盤整備が大きかった為、今回は一部分の整地にとどまった。旧校舎跡地を発掘の対象とした。なおここは旧校舎の基礎コンクリートを除き、その上を全面覆土して、新グラウンドとする計画のため、主として遺跡保存を主目的とする緊急発掘調査である。

調査は丸山敏一郎調査団長、柴登巳夫博物館学芸員を担当者とし、調査員及び町内の調査作業員の協力を得て、建築工事計画の中に、調査計画を特設して、入念に調査をした。なお中学校の校地内であるため、身近かな教材として中学生の学習に資することも多かった。

調査結果は章を追って明らかにするが、主なものとして炉址内出土土器がある。復元後郷土博物館に保管するが、中学校に貸与展示し、30年前の棟札と共に学習の貴重な資料として活用する予定である。

酷暑の中で厳しい作業をされた本調査に参加された皆さん、また本報告書を作成された関係の方々には厚く御礼を申し上げます。

## 例 言

1. 本書は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10230番地に所在する中山遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和59年8月23日～31日まで、実測作業9月1日～3日まで引き続き整理作業を行なった。  
作業分担は次の通りである。  
土器の復原——福沢幸一・遺構実測図の整理——久保寿一郎、柴登巳夫、石川寛  
土器の実測、トレース——柴登巳夫、竹入洋子・石器の実測、トレース——柴登巳夫  
白鳥宏幸、唐沢剛俊・土器の拓本、測面実測——山内志賀子、山口勝博、白鳥宏幸  
写真図版の作製——柴登巳夫
3. 本書に掲載した遺構の写真は柴登巳夫が撮影したものをを使用した。
4. 本書の執筆は丸山敏一郎、柴登巳夫が行なった。
5. 本書の編集は発掘調査団が行なった。
6. 本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

# 本文目次

題 字

教育長 樋口彦雄

序

◇ ◇

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

第 I 章	遺跡の立地	1
第 1 節	位 置	1
第 2 節	自然環境	2
第 3 節	歴史的環境	3
第 II 章	調査の経過	5
第 1 節	発掘調査に至るまで	5
第 2 節	調査の概要	6
第 III 章	遺構と遺物	7
第 1 節	遺 構	7
	(1) 炉 址	8
	(2) 溝状遺構	9
	(3) 土 埴	10
第 2 節	遺 物	11
	(1) 土 器	11
	(2) 炉址内出土土器	14~15
	(3) 既出遺物	16~17
第 IV 章	遺跡の保存状況	18~26
	ま と め	27

## 挿入目次

第 1 図	位置図	1
第 2 図	遺跡周辺の地形	2
第 3 図	周辺遺跡分布図	4
第 4 図	遺構全測図	7
第 5 図	炉址Ⅰ実測図	8
第 6 図	炉址Ⅱ実測図	8
第 7 図	溝状遺構実測図	9
第 8 図	土坑 1 実測図	10
第 9 図	土坑 2 実測図	10
第 10 図	土坑 3 実測図	10
第 11 図	土坑 4 実測図	11
第 12 図	土坑 5 実測図	11
第 13 図	土坑 6 実測図	11
第 14 図	溝状遺構及びグリッド内出土土器拓影	12
第 15 図	土坑内出土土器拓影図	13
第 16 図	炉址内出土土器実測図	14
第 17 図	石器実測図	15
第 18 図	縄文式土器実測図 (既出遺物)	16
第 19 図	土製品実測図 (既出遺物)	17
第 20 図	試掘地点配置図	19
第 21 図	試掘地点地層状況図 (横断)	21
第 22 図	試掘地点地層状況図 (縦断)	23
第 23 図	地形状況図 (旧校舎建築前)	25
第 24 図	遺跡保存状況図	26

## 圖 版 目 次

- 圖 版 1 遺跡全景，溝狀遺構
- 圖 版 2 炉址狀況
- 圖 版 3 土抃
- 圖 版 4 土抃
- 圖 版 5 土抃，炉址内土器
- 圖 版 6 石器出土狀況
- 圖 版 7 出土石器，土器
- 圖 版 8 既出遺物，土器，土製品
- 圖 版 9 調查狀況
- 圖 版 10 調查參加者，中学生見学風景

# 第 I 章 遺跡の立地

## 第 1 節 位 置 (第 1 図)

中山遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10230番地に所在する。箕輪町のほぼ中央に位置し、箕輪中学校旧校舍敷地が遺跡の中心である。天竜川西岸段丘上突端に列状に並ぶ遺跡の一つであり、北隣りには、町商会館、博物館、消防署、町役場庁舎と続いている。

国鉄飯田線伊那松島駅からはほぼ西に約500mの河岸段丘上突端にある。標高はおよそ700mで眼下を流れる天竜川との比高は約30mを計る。



第 1 図 位置図

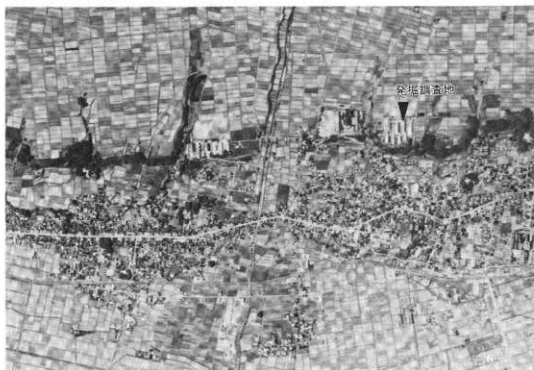


## 第2節 自然環境

諏訪湖を源とする天竜川は、伊那の平を形成し、箕輪町を東西に二分するように南流している。遺跡周辺を特色づける地形は、扇状地と河岸段丘である。

天竜川西岸に発達した雄大な扇状地は、天竜川に流れ込む中小河川によって形成されたものであるが、なかでも最も流路の長い大泉川と黒沢山を源として流れる帯無川によって形成された扇状地上の段丘突端に中山遺跡は位置している。この複合扇状地は礫・砂・粘土・ローム（火山灰）等が相重って堆積したもので、東方に向けて緩やかな傾斜をしている。

遺跡の立地する段丘上より東方に目を転ずれば、眼下には天竜川とその氾濫原が広がり、天竜川左岸（竜東）へと続いている。竜東の扇状地及び段丘等はこの地域においては小規模である。その背後には赤石の山脈を経て、はるかにそびえる雄大な南アルプスの麗峰を見渡すことができる。竜西の複合扇状地の扇頂部・扇尖部より地下に浸透した地下水は、伏流水となって洪積台地の下をくぐって段丘崖下に清水となって湧き出している。この段丘下の湧水群は今日でも水道水として重要な水源であり、年間の水温もほぼ一定の15℃前後の測定値が得られている。この豊富でしかも清澄な湧水が段丘上に居住した古代人の飲料水であり、農業用水でもあったのである。このように地理的自然条件に恵まれた一帯は古代人にとって絶好の居住地であったにちがいない。



第2図 遺跡周辺の地形

### 第3節 歴史的環境

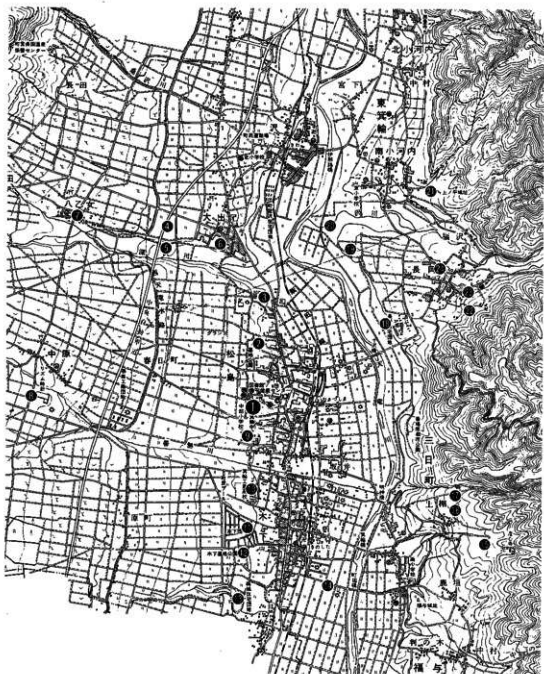
中山遺跡を囲む歴史的環境は実に豊富なものがある。箕輪町は河岸段丘と数多い扇状地によって形成された地形は古代人にとって好的な居住地であったにちがいない。そのため町内には先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、その総数は200ヶ所ほどに及び、上伊那郡内における屈指の遺跡地帯といわれている。

その中においても天竜川西側の段丘突端部に切れ目なく並ぶ遺跡群がある。中山遺跡はこの中の一つである。遺跡の南側には藤山遺跡があり、帯無川を過ぎると県立箕輪工業高等学校のある上の林遺跡に至る。本遺跡は校舎の全面改築に伴い、昭和55年から57年にかけて、3次の発掘調査を実施した。縄文時代早期末から中世に至る多数の遺構・遺物が出土し、その内容がかなり解明されている。続いて南側には北城遺跡が位置している。この遺跡は昭和47年に調査が実施され弥生時代後期から平安時代にかけての大集落が検出されている。段丘上に並ぶ遺跡群の中でも最大級のものとして推定される。町境から南箕輪村に入っても同様に遺跡が続いている。北側に目を転ずれば、町役場の位置に松島氏の城跡へと続いている。中世末に武田軍を相手に勇名を鳴り響かせた藤沢氏の支城と伝えられる。現在はこの地内に城主の墓地といわれる場所があり、町指定史跡となっている。

深沢川が天竜川と合流する段丘に、全長60m、前方部の巾45mという壮大な規模を有する松島王墓古墳がある。6世紀後半の築造と推測されるこの大古墳を見る時、これを造ることが可能な絶大な権力と、その経済力は何であったのであろうかと考えさせられる。周辺の地形を見てまず目に入るのが段丘下の氾濫原である。ここは箕輪遺跡と呼ばれる遺跡地帯であり、その規模は100ヘクタール余といわれている。古代水田址を含む遺跡であり、当時から米生産の一大中心地であったと考える。これは古墳出現の大きな要因であり、以後においても、ここ一帯から生産される米は、時代の権力者の目をつける所となっている。その一つとして、藤沢頼親が建武年間(1324)に箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、その天険もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源とするという目算理由があったと思われる。田中城を水田地帯の真中に築いたのも同様な考えがそこにあったものと推測される。

一帯の歴史的環境はどの時代を見ても、段丘上と天竜川面とが、必ず何らかの関係を有して来ている。これは竜東においてもほぼ同様なことがいえる。

中山地籍は現在箕輪中学校の敷地が大部分を占めている。遺跡の中心はグラウンドの下になっているが、大切な遺跡の一つである。



- ①中山 ②本城 ③王墓古墳 ④中道 ⑤愛地 ⑥大出
- ⑦五輪 ⑧並木下 ⑨藤山 ⑩上の林 ⑪北城 ⑫南城
- ⑬猿楽 ⑭箕輪遺跡群 ⑮澄心寺下 ⑯田畑 ⑰御射山 ⑱十沢
- ⑲羽場の森古墳 ⑳春奈古墳 ㉑上の平 ㉒長松寺下 ㉓石仏 ㉔角畑古墳

第3図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅱ章 調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

中山遺跡は、箕輪中学校敷地が中心である。昭和57年より開始された校舎全面改築により、旧校舎跡地をグラウンドにするため、それに伴ない、遺跡の保存状況調査を主目的とした、緊急発掘調査を計画した。旧校舎解体を夏休み中としたため、夏休み明けから調査を開始することとし、調査団長には、日本考古学協会会員の丸山敏一郎氏をお願いし、発掘調査を実施する運びとなった。

#### イ) 調査団

調査団長	丸山敏一郎	弥生ヶ丘高校教諭 (日本考古学協会々員)
調査員	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
◇	久保寿一郎	九州大学大学院生
◇	石川 寛	箕輪町教育委員会職員
◇	福沢幸一	長野県考古学会会員
ロ) 事務局	樋口彦雄	箕輪町教育委員会教育長
	北川文雄	◇ 社会教育課長
	太田文陳	◇ 社会教育係長
	柴登巳夫	箕輪町郷土博物館学芸員
	竹入洋子	◇

#### ハ) 調査協力者

唐沢清人	白鳥宏幸	山内志賀子	堀内昭三	山口勝博
唐沢剛俊	原ひろみ	原まゆみ	向山美和	

## 第2節 調査の概要

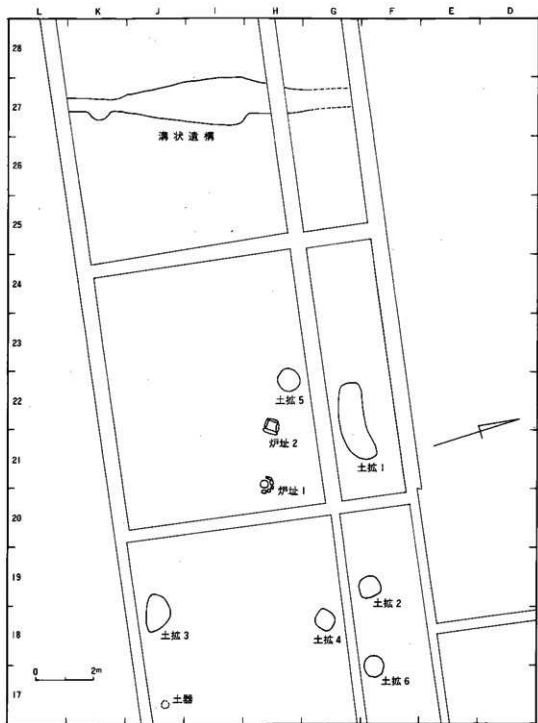
昭和初年ころの西天竜水路の開通に伴い段丘上一帯は広い面積が水田となった。中山地籍も開田され水田になったが、昭和十年代になってからのことである。その時に緩やかな傾斜面は西側が切り土になり、東側が置き土になって水田化したのである。大型機械の少ない当時としては、あまり大きな地形の変化は無く、埋蔵されている遺物、遺構には影響は少なかったと思われる。

昭和30年統合中学校の建設が着工され、約10ヘクタールが校舎建築面となった。この時にはかなり地形が変化し、埋蔵されていた遺物、遺構にも影響があった。このことについては後述する。発掘調査は8月23日から着手した。調査地点は第二体育館の南側に設定し、表土をブルドーザーで排土してからにグリッドの設定へと進める。校舎建設時における基礎コンクリートが縦横に走りこの位置における遺構等の保存状況は約70%くらいであった。調査範囲を四方に拡大し、遺構の保存状況の確認を進めた。校舎敷地全体の状況を知る為に東西、南北にクロスするように二列のグリッドを設け、地層状況を調査した。その結果については後述してある。これにより、グラウンドとして残る面の遺構の保存状況をほぼ推定することができた。調査範囲内における遺構、遺物は少なかったが、全体的な状況を確認することができた。



# 第Ⅲ章 遺構と遺物

## 第1節 遺構

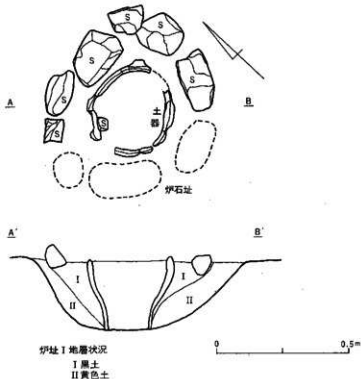


第4図 遺構全測図

# 1. 炉址 (第5図)

## イ) 炉址 I

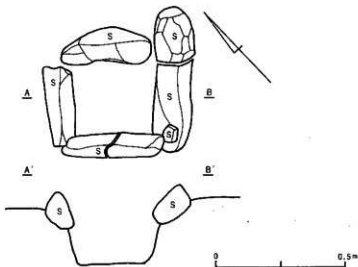
調査地の中央やや東寄り、H-20・21グリッドより検出された。楕円形の石6個をほぼ円形に配し、最大25cm程の石を用いている。現存するのは6個であるが、南西部に石を配した跡と思われる窪みが3ヶ所あり、最初は9個であったと思われる。内側に土器を埋設している。内部の状況から炉として使用した形跡は見られない。又、炉址に伴う住居址は確認できなかった。



第5図 炉址 I 実測図

## ロ) 炉址 II (第6図)

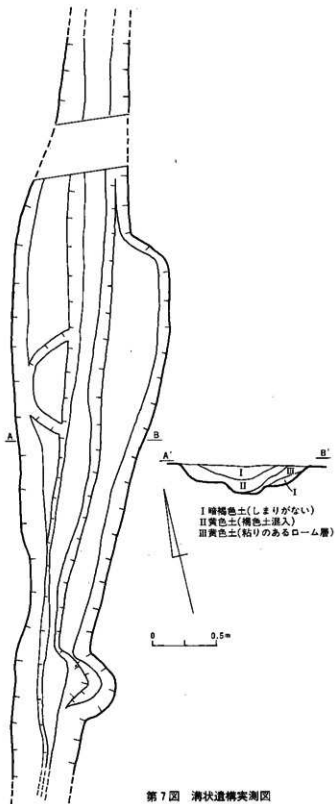
炉址 I の西1.8mの H-21・22グリッドより検出された。30-50cm程の長方形の石を方形に配して炉を形成している。炉としての規模は小さく、炉址 I と同様炉として使用した形跡はない。両方共に炉としての形を整えているが、住居址との関連もはっきりせず、どのような目的で作った施設か決めることのできない状況にある。



第6図 炉址 II 実測図

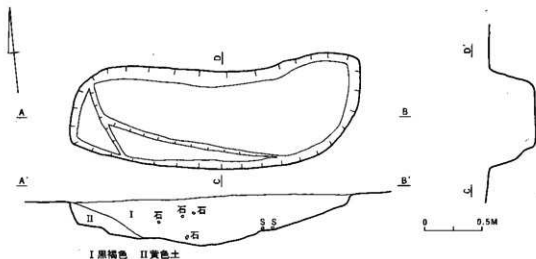
## 2. 溝状遺構 (第7図)

遺跡調査区西寄りの G、L-27グリッドに位置する。遺構はほぼ南北に構築されており、検出された範囲は約10m余である。溝の深さは、落込確認面より平均して20cm前後である。中央部で巾が1m余と広くなり両端が狭い形になっている。底面はほぼ平らで小砂が少量あり、水の流れたことも考えられる。底は北がわずかに低い傾斜を呈している。又、壁は傾斜のゆるい斜壁であり、壁面はかなりしっかりとした状況に掘り込まれている。この状況からどのような性格の遺構か判断することは困難であるが、遺跡の立地状況から判断して、西側が高く、北と東側が低い地形であるため、住居地帯へ雨水等の流込みを防ぐ為の、溝状遺構かとも思われる。溝中からは加曾利E式土器の古い時期のものが出土している。



第7図 溝状遺構実測図

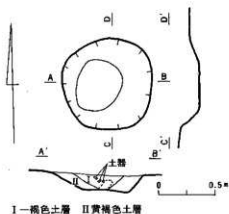




第8図 土坑 I 実測図

## 土 坑

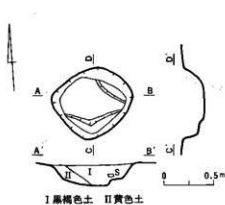
調査区中より6ヶ所の土坑が検出された。土坑は、Iを除いてはほぼ円形を呈している。土坑はG-21グリッドを中心に検出されている。東西に長い小判形を呈している。小石を含む黒褐色土が入っており、壁はやや急な斜壁を呈している。1片であるが、縄文早期末の粕畑式土器に類似する土器が検出されている。土坑2はF-19グリッドに位置し、径80cmのはほぼ円形で、深さは25cmほどと浅い。土坑3はやや変形の五角形を呈している。黒褐色土中に小石を含みやや急な斜壁である。縄文前期から中期初頭にかけての土器片を出土している。土坑4は2の南に位置し径70cmほどの円形を呈している。深さは20cmを計り底は2段になっており、縄文中期加曾利E式土器を出土している。土坑5は炉址2の西側に位置し径80cmの円形を呈している。土坑6は径80cmの円形を呈し急な壁になっている。縄文前期末から中期初頭にかけての土器を出土している。



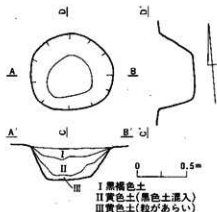
第9図 土坑 II 実測図



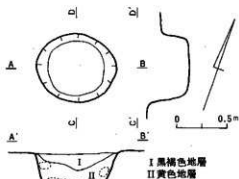
第10図 土坑 III 実測図



第11図 土抔4実測図



第12図 土抔5実測図

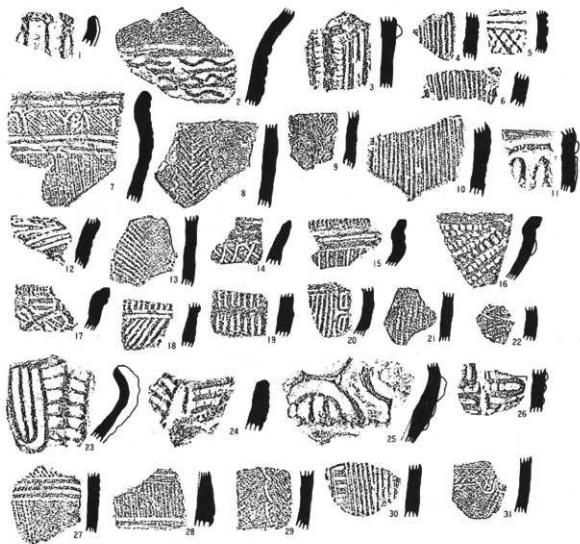


第13図 土抔6実測図

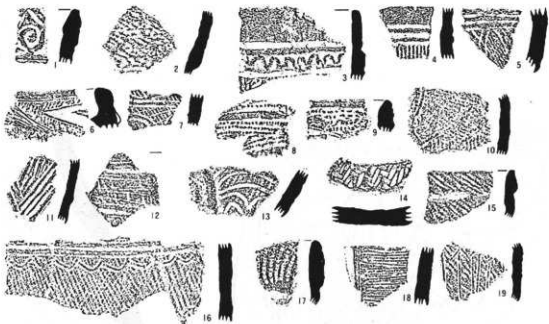
## 第2節 遺物

### (1) 土器 (第14図)

図の1～6は溝状遺構中から出土したものである。1は口縁の一部で、縦に隆帯を貼付けている。2は頸部で横走る隆帯の間に波状に粘土紐を貼付けている。胎土中には細かな雲母粒と、やや大きめの石英粒を含み、焼成良好である。器の内面は表に比べ、やや雑な仕上りをしている。縄文中期前半(阿玉台式)の土器である。3～6は半割竹管を施文工具とした土器片で、赤褐色を呈し、焼成良好で、内面を丁寧に仕上げている。7～22は表面採集土器で、7は深鉢形土器の口縁部で、施文工具の半割竹管を大小使い分け文様に変化をつけている。赤褐色の胎土中には多量の雲母と、やや大きめの石英粒を含み、焼成は中位である。縄文中期初頭(梨久保期)の特徴を持っている。8, 9, 22は結節S字縄文を施した土器である。10～12は加曾利E式土器で10は黄褐色を呈した土器で内面がきわめて丁寧に磨かれており、焼成も堅く仕上がっている。竹管で縦位に沈線が走っている。16は口縁部片である。太い竹管の背を用いた



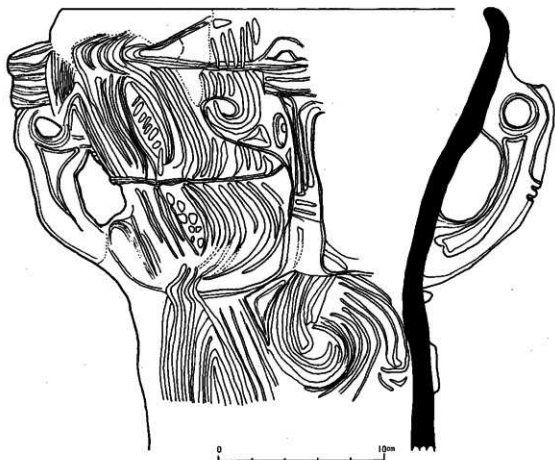
第14図 溝状遺構及びグリッド内出土土器拓影



第15図 土埴内出土土器拓影

連続爪形文が施文され、縄文中期前半の（阿玉台式）特徴をもっている。23～26は大形土器の一部である。それぞれ粘土紐を貼付けて大きな隆帯文様が施されている。太い竹管で連続爪形文を付けており、縄文中期中葉（加曾利E式の古い時期）の特徴を持っている。27, 28, 30は半割竹管を用いて施文する縄文中期初頭の土器である。29は結節縄文を施したもので前記同様の時期で、黒褐色の器面は堅く焼かれている。31は竹管を用いて浅く平行沈線文が施された平出3Aと呼ばれる土器の特徴を持っている。

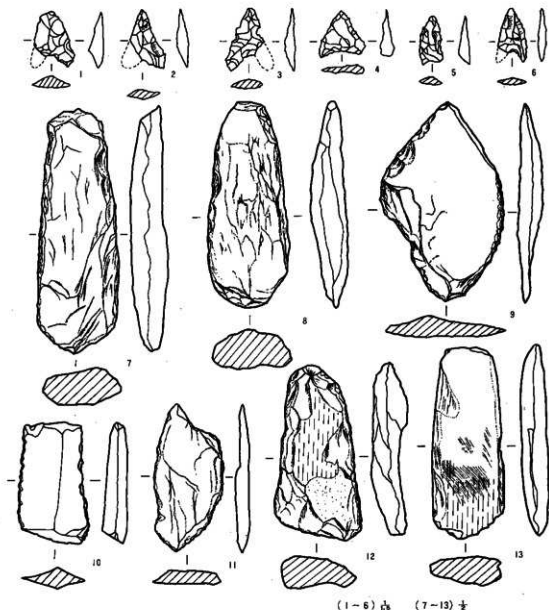
第15図の拓影土器は土埴Ⅰ～Ⅵから出土したものである。1～2はⅠからの出土で、1は沈線文を多用した加曾利E式土器の口縁部である。2は東海系の土器で縄文早期の柏畑式土器の特徴を見ることができる。3～5は土埴Ⅱからの出土である。3はやや小形の深鉢の口縁部で、口縁に平行して沈線と隆帯を施し、その間に波状に細い粘土紐を貼付けている。6～11はⅢから出土した土器片で、いずれも縄文前期末の諸磯C式、暗ヶ峯式などの特徴を持っている。関東での十三菩提式土器などと平行期にある。12～14は土埴Ⅳ出土の土器である。15はⅤから出土した土器で、複合口縁を有した縄文中期初頭の土器である。16～19は土埴Ⅵ出土の土器で16は中期初頭、梨久保式の特徴を有し半割竹管を多用して施文している。出土土器を大まかに分けると、縄文前期末、中期初頭、中期中葉の加曾利E期の3時期になる。縄文土器においては既出の遺物についてもほぼ同様な状況である。



第16図 炉址内出土土器

(2) 炉址内出土土器 (第16図)

炉址の内から出土した土器である。炉を形作る石のレベルより10cmほど下って、土器口縁部が検出された。口径26cm、現高27cmを測るが、底部が欠損しており器高は35cm程度と推測される。肩部から胴部にかけて把手が四ヶ所に付けられ、重量感のある土器である。胴部から下はほぼ垂直に下り、器面は隆帯が全面を覆い複雑な文様構成である。焼成があまり良好でないため口縁部は欠損が多い。縄文時代中期後半の土器である。



第17図 石器実測図

### (3) 石器

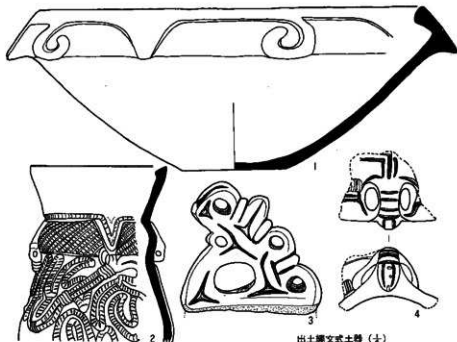
出土石器中1～6は石鏃である。それぞれ脚部を欠損している。1, 3, 5, 6は黒耀石を材とし、他はケイ岩製である。脚部の挟りが比較的浅くなっており、形は一定していない。7～12は打製石斧で13のみ磨製石斧である。多くが短冊形を呈している。9～11は両サイドに刃部を持ち、そこが使用されたと考える。13はほぼ全面を磨いて石器を形作っているが、刃部が欠けている。石質は砂岩質のものが多い。

#### (4) 既出遺物

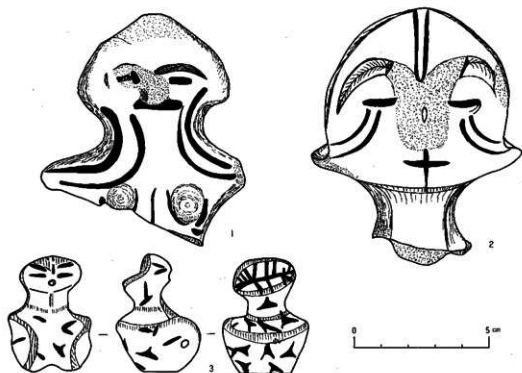
##### 土器 (第18図)

第18図に示した四点の土器はいずれも旧校舍新築時およびそれ以前に出土したものである。1は故小池修兵氏によって採集された。口径40cm、高さ17cmを計る大形の浅鉢形土器である。口縁から6cmほどの巾広い縁が付けられ、その表面にわずかに隆帯が付けられている。器面内外共に丁寧に研磨され焼成良好な土器である。縄文中期中葉の土器である。

2は胴上部のみであるが、口径14cm、現高18cmを計る。口縁から肩部にかけては無文帯であり、肩部で二回くびれている。その部分に四ヶ所の小把手が付けられ、他は細い粘土紐がクロスして籠目状文様を呈している。胴部にかけては巾の広い隆帯が曲線を描きその上にきざみが施されている。縄文中期後半の土器である。3は昭和12年3月出土とあり、中山出土の遺物としては最も古い発見である。口縁に付けられた把手であり、口径は30cm程度の土器である。4は口縁部に頭をのせた蛇体把手である。器面は赤褐色を呈し、胎土中には多量の石英を含み焼成は良好である。既出の縄文土器は多量に保管されているが一部を記した。



第18図 縄文式土器実測図 (既出遺物)



第19図 既出遺物 土製品

第19図に示した3点の出土品は共に昭和30年に、統合中学校新築時における工事中などに出土したものである。1、2は土偶の頭部であり、3は土偶型土鈴である。1に示す土偶は胴上部のみ、2は首から上だけである。他の出土状況と同様に強烈な壊され方をしており、そこで実施された宗教的な出来事を推測する時、土偶の持つ神秘的な力を感じる。また図の2の土偶は、目の下に沈線による二本線が施文され、顔への彩色か入墨を伺わせる。口を十文字になっており何を意味するのか推測しかねる。

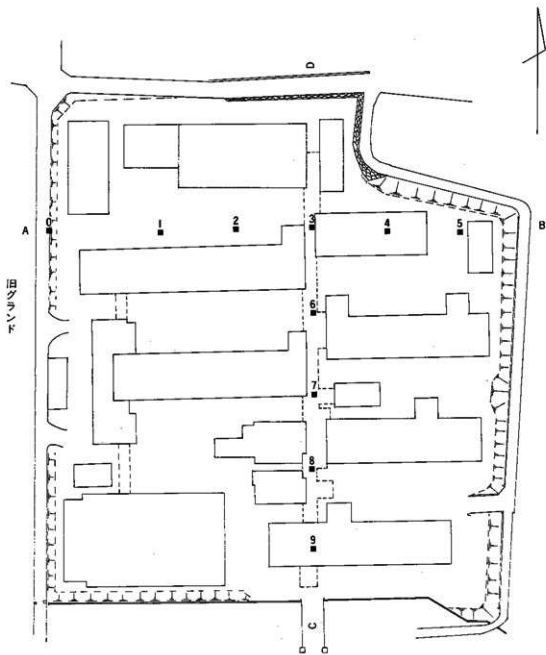
3も同じく中山遺跡出土の土製品である。大きさは高さ4.3cmで、上部は顔面で、下部は土鈴になっている。頭部をつまんで振るとカラカラと小さな音がする。胴部には、全体に三又文様がつけられており、時代的には縄文中期中葉と思われる。形は小さいが非常にととのったものであり、鳴る子は、胴部に数個入っており、小石でなく粘土と思われる。顔のつくりは簡単であるが、非常に写実的で、目・鼻・口が彫られ、頭部の沈線は髪を表わしていると思われる。顔の表情は、とても親しみやすく、見る人をひきつける。県下においてもこの種の土製品は例が少なく、使用目的なども推測し難い。土鈴の発見はかなりの数に上っているので、それらと共通のものと考えられるが、宗教的使用の匂いが感じられる。



## 第Ⅳ章 遺跡の保存状況

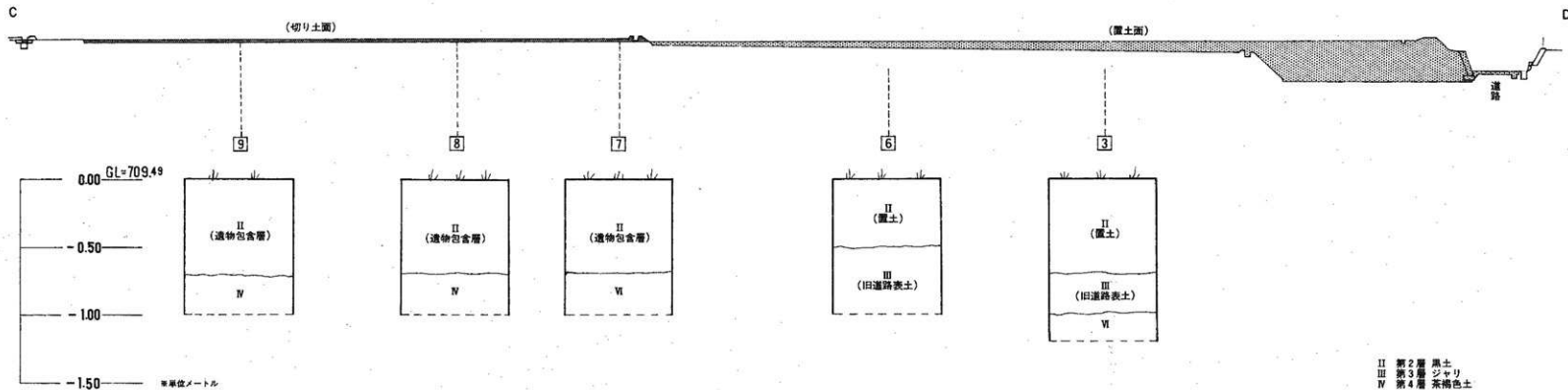
箕輪町内における遺跡分布状況は前述（第Ⅰ章，第3節，歴史的環境）のようであり，天竜川西の河岸段丘上は遺跡の密集地帯である。ここ一帯が水田化したのは西天竜水路開通後の昭和14年ころである。その工事における地形の変化は相当なものであったと思われる。開田作業時においても土器等の出土があったと伝えられ，当時出土したと記された遺物も多い。中山遺跡においても同様な開田工事が実施され，出土遺物も確認されている。この工事は段丘上突端では最初の地形変化であり，遺跡破壊であった。次いで昭和30年代に入り，統合中学校建築の場所として中山地籍が対象となり，中学校校舎建築が実施された。校舎敷地面はほぼ全体が遺跡であったため，部分的に遺構や遺物の検出があり，多くの遺物が採集されている。このことから旧地形の図上復元をしながら敷地面の遺跡保存状況確認を実施した。

まず第20図に示すように，9ヶ所の地層状況確認ピットを設けた。又，旧校舎と旧グラウンドを境する南北道路面が開田工事当時の現状から変化していないことがわかっていたため，この面を基準として各地点を観察した。第22図は敷地のA-B縦断面の地面の移動状況を示したものである。西寄りにおいては当時の水田面から1m余切り土されている。その状況は3の地点まで続き，この付近で地形が一段低くなっている。3地点から東端までは置土となり，5地点では1.8m余の置土を示した。又第21図はC-D横断の状況を示すものであり，5ヶ所の地層観察ピットを設けた。平均して30～50cmの切り土となっているため遺物包含層が部分的に破壊されていることが確認された。北寄り約20mの間は3m余の置土であり，遺跡は保護されている。この状況を平面的に図示したものが第24図である。切り土部分における西側寄りは遺跡は破壊されている。中央部の南北帯状においては一部破壊されているが，調査で示すように遺構は残っているものが多いと思われる。敷地約半分の東側においては深い置土となっているため，遺物はほぼ保護されていると考える。この調査によって旧校舎建築当時における地形変化を確認することができ，敷地内の遺跡保護状況を確認することができた。

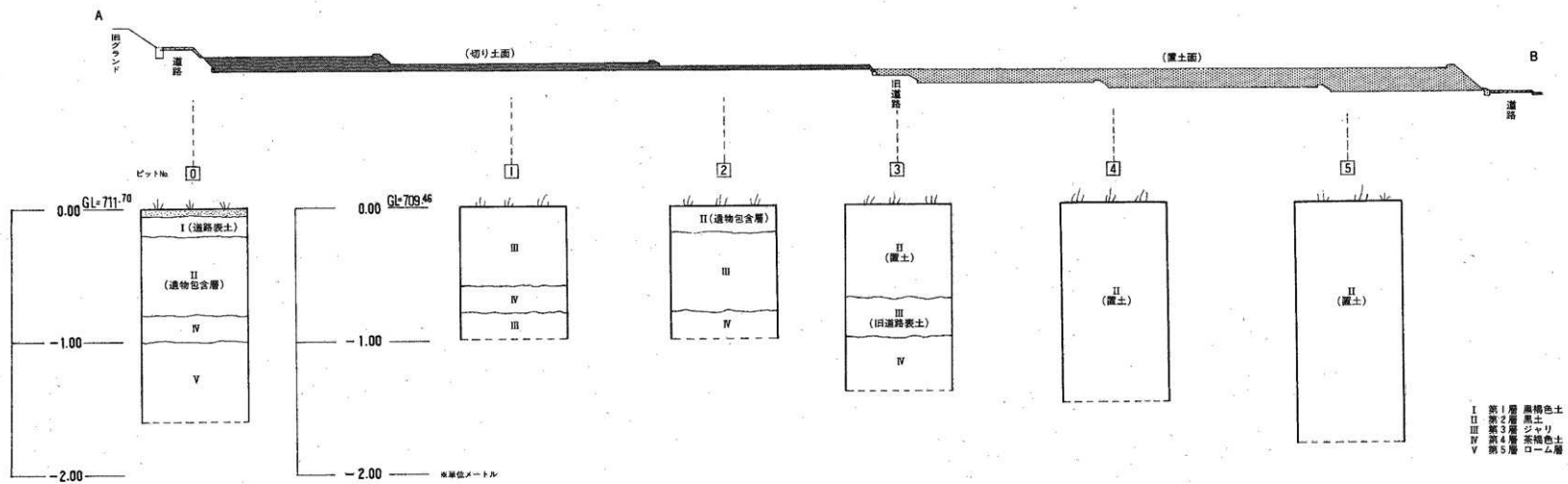


第20図 試掘地点配置図

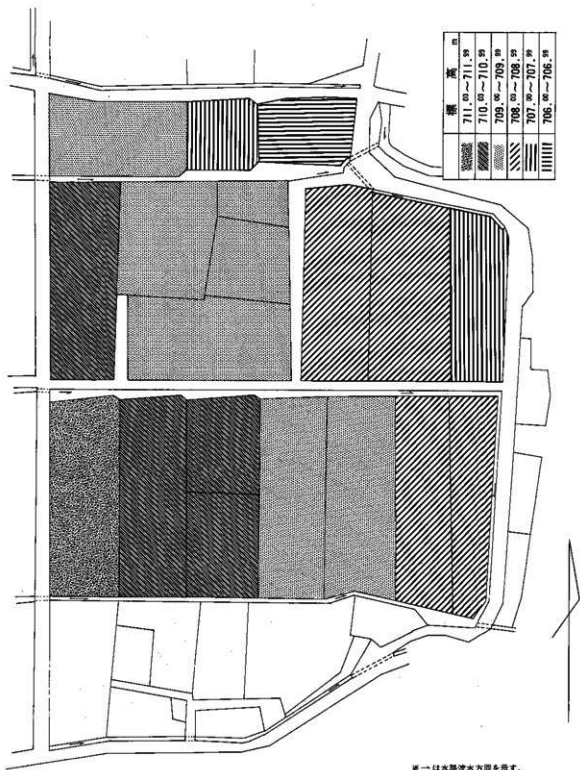




第21図 試験地点地層状況図 (C-D横断)

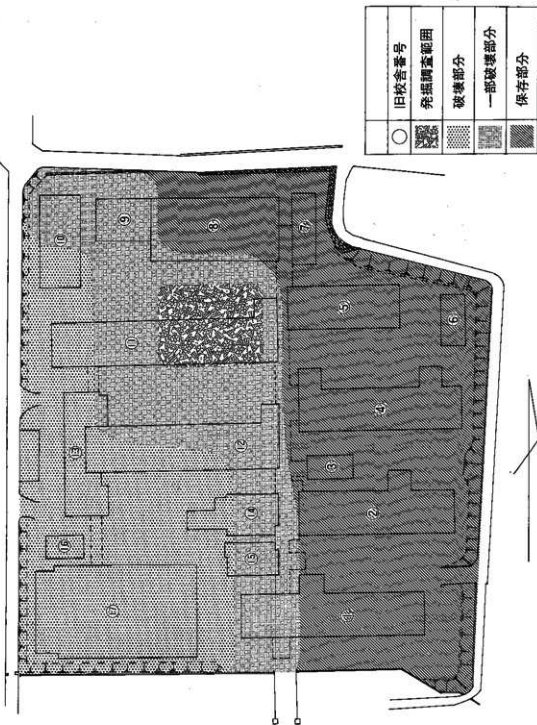


第22図 試験地点地層状況図 (A-B 縦断)



第23図 地形状況図（旧校舍建築前）

旧校舎跡



第24図 遺跡保存状況図

## ま と め

箕輪町内には多くの遺跡が分布している。これらの遺跡の立地状況を概観すると、天竜川兩岸の河岸段丘端の湧水地帯に近い地域、西の中央アルプス、東の伊那山地の山麓地域、天竜川の低位段丘面、及び天竜川の自然堤防上に位置するものが多く、なかでも、天竜川右岸の河岸段丘端には、上の林、北城、南城、猿楽などの大集落遺跡が並んでおり、今回発掘調査を行った中山遺跡もその一つである。

中山遺跡は、立地、地形、既出遺物の状況などからみて、縄文時代中期を中心とする大規模な遺跡であったことが想定される。しかし、過去において、昭和初期の西天竜の開通による開田、昭和30年の統合中学校建設といった2度にわたる造成工事によって、地形も大きく変わっており、遺跡に与えた影響も大きかった。

箕輪中学校校舎全面改築事業は、もとのグラウンドに校舎を建設し、旧校舎跡地をグラウンドに造成するという事業である。工事は先に校舎建設に着手した。とうぜんこも中山遺跡の範囲に含まれる地域と想定されるが、統合中学校建設にあたって切り取られた部分が多く、また、校舎改築に先立つ地盤調査における地層確認の所見から見て、遺構の残在は期待できないことから、工事中に立合調査を実施することとした。その結果、幸い遺構はまったく確認されず、遺物も土器片が数点出土したのみであった。校舎の建設がほぼ完了した本年度、旧校舎を撤去し、グラウンドを造成することになった。工事は現地形を大きく変更することなく、全面に盛土をしてグラウンドを造成するものである。

今回の発掘調査は、旧校舎の基礎コンクリートの撤去によって破壊される部分の発掘調査と、過去の造成工事によって原地形がどのように変わっているか、それによって遺跡のどの部分が地下に埋没されているか、どの部分が破壊されているかを把握することを目的として実施した。その結果については、本文に記述したとおりであるが、初期の目的はほぼ達したものである。

今後も箕輪中学校の増改築工事が計画されることであろうが、その計画の策定、実施にあたって、本報告書が遺跡の保護に生かされることを期待する。

最後に、発掘調査、遺物の実測、図版作成、原稿執筆と精力的になってくれた調査員各氏の労の大きかったこと、箕輪町、箕輪中学校、箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に御協力くださったことをここに記し、厚くお礼申し上げます。

(丸山政一郎)



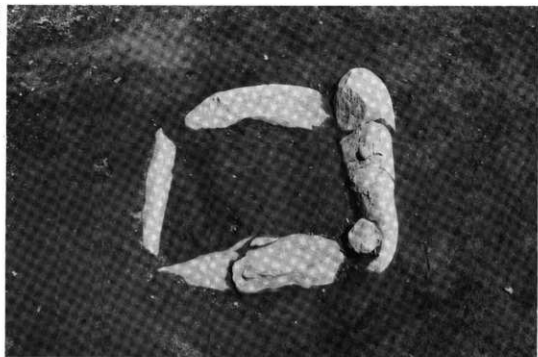
# 圖 版



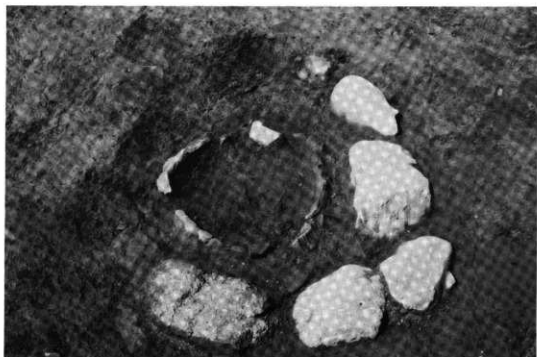
遺跡状況



溝状遺構



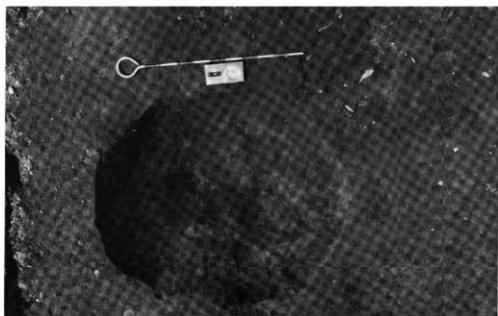
炉址 I



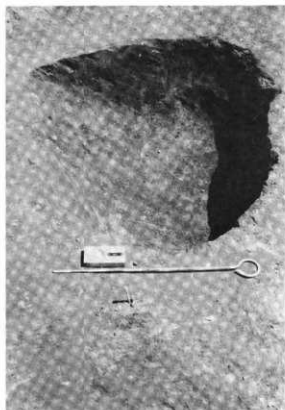
炉址 II



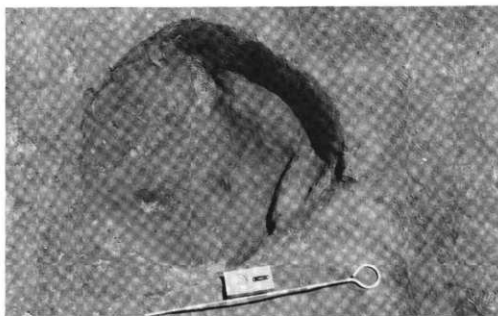
土坑 I



土坑 II



土 絛 III



土 絛 IV



土坑 V



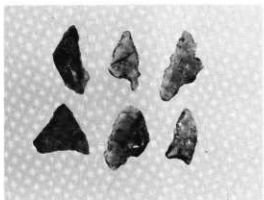
炉址内土器状況



地層断面状況



石器出土状況



出土石器



出土石器



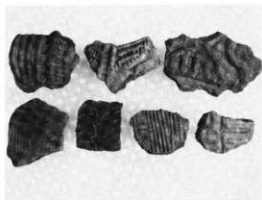
表面採集土器



溝状遺構出土土器



土坑Ⅲ出土土器



グリッド出土土器







調査状況



調査状況



調査参加者



箕輪中学生徒見学

# 中山遺跡

## 緊急発掘調査報告書

昭和60年3月31日 印刷

昭和60年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 榑小松総合印刷所